

## 抵抗と消費とアスタリスク

丸山美佳

### 1. 抵抗としての快楽

アルゼンチンの映画監督アルベルティーナ・カリの《The Daughters of Fire》(2018)は、女性\*たちが自由にセクシュアルな行為を繰り広げるなか、庭に置かれたカウチに一人座り、股を開いてクリトリスを愛撫し、ときにヴァギナに指を挿入しながら自慰をしてオーガズムに達する長いシークエンスで終わる。映画は、クリアでポリアモリーな女性\*たちのロードムービーであり、露骨で多種のセックスが各所で行われ、一緒に放尿をしたりポルノ映画を撮影したりする。大きなドラマもなければ結末もなく、淡々とした会話とセックスで進んでいくストーリーは、ポルノ映画で描かれてきた女性の身体やその欲望に挑戦した挑発的なものである。しかし、隠されてきた女性\*の欲望や快楽を解放すること以上に、アルゼンチンの軍事政権以後も続く、家父長的でホモフォビックな社会から逃避するユートピアな想像力を促しながら、快楽や欲望を求める行為そのものが女性\*たちの相互ケアと抵抗へと繋がっていく。

私は意図的にアスタリスクを付けて「女性\*」と書いている。私が拠点とするドイツ語圏では、より性別を問わない言語にするために性に関わる単語に「\*」が付けられることがある<sup>1</sup>。語尾のアスタリスクは、アイデンティティやそのカテゴリーが常に流動的で、文脈や時代において異なる意味合いを持つことを強調し、その意味で、本質主義的ではない性の理解を促すものとされている<sup>2</sup>。映画に映し出された、年齢や体型、性格、アイデンティティ、出自、文化の違う多様な女性\*たちが互いに性器を愛撫する快楽は、異性愛的空間の概念が前提とされていない。冒頭のモノログで語られるように、身体がどのように(そして誰にとっての欲望として)表象されてきたかということ以上に、女性の身体はカメラの前で、さらには科学や哲学のなかで、領土化され風景の一部になってきた。それに対して、荒野を旅しながら繰り広げられる、穏やかにしかし確実に女性たち\*の快楽へと回帰し続けることは、異性愛規範によって男性たちが生み出す風景を端に追いやり、二元論的な性もなければ、異性愛も同性愛もない、種の再生産という身体的能力保持も問わない、抵抗としての快楽・身体・風景を中心的なものとして生み出していく場を創り出す。

### 2. 「だがしかし、である。」<sup>3</sup>——消費される快楽

カトリーヌ・マラブーはターフとは距離を置いたラディカル・フェミニストの立場から、男性文化である哲学や精神分析におけるクリトリスの抹消——女性の快楽の抹消——を、男性のファロス中心主義

<sup>1</sup> 例えば「Frauen (女性たち)」は「Frauen\*」にすることで、二元論的な性を越えた主体性を意味するようになる。

<sup>2</sup> マラブーのフェミニズムにおける「本質主義」の概念を不適切であるとする視点は示唆的である。ここでは現在支配的な異性愛-生殖規範性中心主義からカテゴリー化、差異化され、市民権、医療、法律、福祉といったあらゆる場所で前提とされている近代的な男女二元的なセックス/ジェンダーを指している。カトリーヌ・マラブー『抹殺された快楽——クリトリスと思考』西山雄二・横田祐美子訳、法政大学出版局、2021年、98頁。

<sup>3</sup> 同上、12頁。

への再加担に警戒しながら、さらには生物学的な女性カテゴリーに結びつく危険性を考慮した上で、フェミニズムの創始者たちが語ろうとしてきた、快楽を生み出すが生殖機能を持たない「無言のシンボル」であるクリトリスの系譜を辿る。トランスフェミニズムや脱植民地主義の言説によって「クリトリスは必ずしも女だけのものではなく、セクシュアリティ、快楽、ジェンダーといった伝統的な見方を覆すリビドーの装置の名となった」<sup>4</sup>、あるいは「女の特権たる「生殖器官」というその単純な地位を欠いたものになった」<sup>5</sup>という言説に触れながらも、マラブーは「だがしかし」と付け加える。

それは彼女自身の「哲学に入り込むことと私の複数の身体に入り込むことは最終的に混ざり合う」<sup>6</sup>という、哲学を身体的に形成する力を探求するうえで、隔たりとして語られてきたクリトリスは異性愛規範の外にある「女性的なもの」の主体化の問題と繋がるからだ。「女性であること」と、「女性的であると主体化すること」は同一のものではなく<sup>7</sup>、「女性的である」クリトリスとその思考は、現行の権力やシステムに従うことにはない「アナキー」な可能性なのであり、その意味で哲学のトランスジェンダー的な実存であるとされる。クリトリスを思考することは抵抗なのであり、フェミニズムはそのクリトリスの女性的なものの闘争から切り離すことはできない<sup>8</sup>。

だからこそ、ポール・B・プレシアードの「ベアトリス」から「ポール」への移行に伴う喪の刻印として身体に残される女性的なものを認め、またジャック・ハルバースタムのレズビアン言説におけるFTMの転換手術における「女性的なものの裏切り」にみる、女性的なものの抹消における問いとともに、女性的なものの現実への回帰、さらにはその思考を目指す<sup>9</sup>。

だがしかし、である。

例えば、マラブーがプレシアードの「サンフランシスコはアメリカのクリトリス」の比喻に、ファロスにとってかわる権力としてクリトリスが使われてしまうのかと警戒するとき<sup>10</sup>、プレシアードのいう「ファルマコ・ポルノグラフィ時代」という現実はその言説から落ちてしまっているように見える。また、セックスワーカーやアクティビストたちの声（まさにクィアと女性的なものの連帯）がいかに性と快楽と労働の言説を押し広げてきたのかという歴史は、女性的であることの主体化として現前するクリトリスのノンバイナリーな思考とどのように関係性を持つことができるだろうか？ 実際に、「サンフランシスコはアメリカのクリトリス」と発言したのは、セックスワーカーでありポルノ俳優である、アーティストのアニー・スプリンクルであり、サンフランシスコはそのようなコミュニティにとって重要な場である<sup>11</sup>。

<sup>4</sup> 同上。

<sup>5</sup> 同上、19 頁。

<sup>6</sup> 同上、146 頁。

<sup>7</sup> 同上、148 頁。

<sup>8</sup> 同上、161-168 頁。

<sup>9</sup> 同上、150-155 頁。

<sup>10</sup> 同上、158 頁。

<sup>11</sup> アメリカにおけるセックストイの発展と草の根の性教育や性の解放については以下を参照。Hallie Lieberman, *Buzz: The Stimulating History of the Sex Toy* (Pegasus Books, 2017).

ファルマコ・ポルノグラフィ時代において、ペニス＝ヴァギナ体制からのクリトリスの解放は、バイブレーダーの使用がヒステリーの言説から解き放たれ、さらにはピルの登場で快楽を持ち自身の身体を管理するエージェンシーとしての女性の主体化を進めた過程と切り離すことはできない。性の主体化と性を取り巻く環境における偏在的なコントロールは、(身体として、またデータとしての) 性行為や身体部位や体液がさらなる性の規範化と商品化を推し進める状況と表裏一体である<sup>12</sup>。私たちはディルドやバイブレーダーといった人口補綴で快楽を生み出し模倣し、ピルやバイアグラ、ホルモン剤といった薬物で身体を管理し変容させ、ポルノで溢れるインターネットと繋がったメディア機器と一体となった環境のなかに生きているのであり、小さな快楽ボタンであるクリトリスはその新自由資本主義のテクノロジーが否応無くもたらす快楽の生産と消費とその主体化の衝突のなかにある。(概して西洋白人の特権的な立場にいた) フェミニズムの創始者たちのクリトリスの記述によって女性的なものの回帰に警戒するのは、いまだ植民地主義や人種差別を内包した西洋中心主義的な欲望によって稼動するテクノロジーが身体とその性を形づくるとき、そのテクノロジーの影響がクリトリスから抹消されてしまうからである。「サンフランシスコはアメリカのクリトリス」は、クリトリスが何かを突き刺したり、抹消されたり、特権化されたりする比喩ではなく、セックスとテクノロジーが結びつき、クリトリスが生み出す快楽がサイバネティクスによって世界規模の貨幣へと変換されるプラットフォームである。しかし、そこには一方で、セックスワーカーやクィアたちの抵抗運動の歴史があり、その運動がいまも生まれてきているのだ<sup>13</sup>。

ファルマコ・ポルノグラフィ時代は、「勃起し射精する」ことが“自然な”男性的であるという前提はすでにディルドの流通によって脅かされているかもしれない<sup>14</sup>。また、バイブレーダーだけでなくクリトリス吸引に特化したセックストイの登場によってクニリングスの快楽がテクノロジーによって模倣された現在、ヴァギナではなくクリトリスを中心とした快楽の追求は、テクノロジーと新自由主義のロジックによってポジティブで自立した消費する主体を生み出す。その影響のなかで刷新され続け、クリトリスはそのテクノロジーを介した性的な主体化と切り離すことができない。クリトリスもすでにサイボーグ的に存在し、二元的な性のあり方の抑圧と抵抗が同時に生まれているのだ。

にもかかわらず、プレシアードは精神分析が相変わらず「(勃起し射精する) 家父長的な男性性と異性愛の男性身体」という立場に留まっていることにトランスジェンダーとしてその疑問を呈さずにはおられず、マラブーは生産性のための子宮とファロスに対するヴァギナとの隔たりとして、快楽のための(それゆえ抹消され傷付けられる) クリトリスを持つ「女性」について論じる必要が再浮上し続ける円環のなかに戻される。

<sup>12</sup> Paul B. Preciad, *Testo Junkie: Sex, Drugs, and Biopolitics in the Pharmacopornographic Era*, translated by Bruce Benderson (The Feminist Press at CUNY, 2013).

<sup>13</sup> Paul B. Preciad, "SAN FRANCISCO, THE 'CLITORIS OF AMERICA', *An Apartment on Uranus*, translated by Virginie Despentes (Fitzcarraldo Editions) [Kindle 版].

<sup>14</sup> Paul B. Preciado, *Countersexual Manifesto*, translated by Kevin Gerry Dunn (Columbia University Press, 2018), p. 64  
また、丸山美佳「試論としての〈ディルド〉—— つくりあげながら、なってしまう」(タリオンギャラリー、2020年) 参照。

### 3. クリトリス\*

テストステロンを打っている友人 S は月経がなく、ヴァギナを持ち、1 cm ほどに収縮した子宮と肥大したクリトリスを持つ。ピルを飲む友人 H は少量の月経があつて、ヴァギナと子宮を持ち、クリトリスを整形した。子宮内システム<sup>15</sup>を挿入している友人 Y は月経がなく、ヴァギナと子宮とクリトリスを持つ。クリトリスを持っているものの異なるセックス／ジェンダーとセクシュアリティ、そして（性的に限らず）欲望と快楽を持つ彼らのこのような事実を並べたとき、私はクリトリス的思考だけが、フェミニズムにおける異性愛規範から外れた抵抗としての思考の場として考えるべきなのか戸惑う。また、脱植民地主義フェミニズムを提唱するマリア・ルゴネスは、そもそも男女の二元論というカテゴリーこそが「（白人＝）人間」の定義を生み出してきたのであり、そのシステムから脱することを呼びかけるが、その視点からすれば全てのクリトリスが「クリトリス」として認められてきたわけではないだろう。

プレシアードとハルバースタムの両者はトランスフェミニストの立場だけでなく、西洋中心主義と植民地主義のイデオロギーと深く結びついた（白人女性の特権的）フェミニズムへの警告のなかにトランスの思考を生み出してきている。マラブーはその警告においても慎重であると同時に、その統合失調的な非西洋文化に対するクリトリスの傷付きを巡る（白人）フェミニズムの行き詰まった状況を描くが、狭義的に女性の快楽であると同時に女性である印としてクリトリスが実際に切除されるとき、果たしてクリトリスの思考はその活路を見出すことができるのだろうか。

プレシアードの「カウンターセクシュアリティ」を思い出しておこう。プレシアードは自然主義的な性や生物学的に偽装された社会契約のための男女の二元論ではなく、生きた身体として認識し合う反セクシュアリティ的契約への移行を提唱する。そこでは、支配的規範によって「性的」とであると登録されてきた臓器、行為、反応、美学の意味や機能から離れて思考することが要求される。プレシアードは、哲学における性ないしジェンダーとその主体化の問題は、ディルドといった人工物やバイブレーターや薬物によって生み出される快楽と身体が一体となった、性／生を生み出すテクノロジーの装置とともに思考されるべきであると訴えているのだ<sup>17</sup>。

また、アーティストの嶋田美子は、自身が企画した展覧会「おんなのからだのつかいかた」（2000 年）のリーフレットに過去のフェミニストアーティストが「女の体（特に女性性器）に肯定的なアイデンティティを付加」しようとした一方で、排他性とステレオタイプの呪縛をもたらしたことと、フェミニズムにおける過剰で「まじめ」な教養主義を疑問視しながら、「女の体に一つのジェンダー・アイデンティティを与えるのではなく、その体を使ってジェンダーの多様性を表現」することを問う必要性と、性器の即物的な在り方や身体の使用を説く<sup>18</sup>。

クリトリスは確かにファロス中心主義のシステムに対してアナーキーな存在でノンバイナリーな思考であり、抵抗する女性的なものである。それが抹消されてきた歴史は書き直され続けるべきであろう。

<sup>15</sup> 日本語では一般的に「子宮内避妊リング」と呼ばれているが、必ずしも避妊目的で使われているわけではないので、ここでは英語の「Intrauterine system」の日本語訳として「子宮内システム」としている。

<sup>17</sup> Preciado, *ibid.*

<sup>18</sup> 嶋田美子「持ち物としての身体 道具としての性器」、『おんなのからだのつかいかた』（オータ・ファイン・アーツ、2000 年）。

しかし、ファルマコ・ポルノグラフィ時代においてその抵抗は、テクノロジーによる管理とアルゴリズムのマーケティングデータの一部であることも忘れてはいけない。そのため、暫定的であったとしてもアスタリスクを付けて、ファロスの哲学が前提としてきた「(抹消されるべき) 女性的であるクリトリス」を超えていくことの可能性とそれが消し去ったものたちを可視化していくことの必要性も追加しておきたい。「クリトリス\*」、あるいは「女性的\*である」という思考は、(西洋白人) 異性愛男性文化を耐え忍ぶのではなく、その勃起と射精の円環に戻されることの拒否である。